

「子どもの居場所」における食教育の可能性
—食を中心とした実践介入と効果の検証—

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2022-04-06 キーワード (Ja): 子どもの居場所, 食教育, 実践介入, 効果, 検証 キーワード (En): own place for children, food education, practical intervention, effects, inspection 作成者: 渡名喜, まみ, 浅井, 玲子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002017872

「子どもの居場所」における食教育の可能性

—食を中心とした実践介入と効果の検証—

渡名喜 まみ¹⁾, 浅井 玲子²⁾

The actual possibility of the food education in own place for children.
—Practical intervention centered on food and verification of effects.—

Mami TONAKI¹⁾, Reiko ASAI²⁾

Abstract

According to a Comprehensive Survey of Living Conditions published by the Ministry of Health, Labour and Welfare, the child poverty rate in Japan was 13.9% in 2016. A similar survey conducted in Okinawa Prefecture showed the child poverty rate was 29.9% in 2015. Child poverty has numerous adverse effects on child development. The Third Basic Plan for the Promotion of Shokuiku (Food and Nutrition Education) established by the Ministry of Agriculture, Forestry and Fisheries aims to satisfy the dietary and nutritional needs of children and promote food and nutrition education. It will provide children from single-parent homes with learning support and meals at sites such as afterschool centers. While own place for children programs offer meal-, life-, and learning-support services, few studies have examined their effectiveness. By examining food-focused initiatives at Children House Z, this study examined the introduction of food and nutrition education at own place for children. “Observation log sheets” were used at Children House Z to clarify the changes in children over a one-year period.

Positive changes were observed in six areas: 1) self-sufficiency; 2) trying different things; 3) establishing daily routines; 4) learning about food, cooking and the life-giving value of meals; 5) expressing preferences and desires related to food; and 6) learning to enjoy meals with others.

These findings showed that the food-focused initiatives at own place for children centers were effective for resolving the issues of school children. Future challenges will be to review study subjects, research methods, and study periods and to build on previous achievements.

Keywords 子どもの居場所 (own place for children)、食教育 (food education)、実践介入 (practical intervention)、効果 (effects)、検証 (inspection)

1. 緒言

2021年4月農林水産省は第4次食育推進基本計画 (2021年～2025年)¹⁾を公表した。重点事項のひとつである「生涯を通じた心身の健康を支える食育の推進」と関連する主な取り組みの中には「貧困等の状況にある子供に対する食育の推進」が掲げられている。具体的には、

・「子どもの貧困対策に関する大綱」に基づき、

フードバンク等と連携し子供の食事、栄養状態の確保、食育の推進に関する支援

- ・「子どもの未来応援国民運動」において、貧困の状況にある子供たちに食事の提供などを行う子ども食堂等を含むNPO等に対する支援
- ・経済的に困難な家庭等に食品を届ける子ども食堂等に関する支援

¹⁾ 琉球大学農学部

²⁾ 琉球大学教育学部

であり、子どもの貧困に関する取り組みは、その記述が初めて盛り込まれた第3次計画²⁾から引き継いだ形となっている。

全国一子どもの貧困率が高い沖縄県においては、ひとり親世帯や貧困世帯、親が不安定な雇用環境にある家庭も多く、基本的な生活環境を整える経済的・時間的余裕がない家族も多い。それらを視野に入れる事で、食に関する教育の底上げや可能性の拡大にも繋がる事となり、食教育の持つ力の再評価にも繋がると考えている。

第4次食育推進基本計画にも掲げられた、子ども食堂を含む子どもの居場所は全国的にも増えている。尚、子どもの居場所とは、内閣府によれば「子供食堂のような家でも学校でもなく自分の居場所と思えるような場所」³⁾と定義され、「沖縄県子どもの貧困対策計画【改定計画】」⁴⁾では生活の支援において、子どもが安心して過ごせる居場所を確保し、地域の実情に応じて、食事の提供や共同での調理、生活指導、学習支援を行うとともに、キャリア形成等を行う市町村の取り組みとしてその設置を促進している。令和元年度内閣府「子供の貧困実態調査に関する研究」報告書⁵⁾によると、非困窮世帯と困窮世帯を比べると、生活面では起床や就寝時間の遅さ、睡眠時間の短さ、歯磨きや入浴の頻度の少なさ、学校生活への意欲の低さ、自己肯定感の低さなどの傾向がみられた。食に関しては、朝食や夕食の欠食、孤食、野菜・肉や魚を食べる頻度が低く、インスタント麺の摂取などが高い傾向にあった。更に裕野ら⁶⁾も世帯収入が貧困基準以下の世帯の子どもは、朝食、野菜、外食の摂取頻度が低く、肉や魚の加工品、インスタント麺の摂取頻度が高いことが示され、世帯の収入と子どもの食生活に関連があることが示している。

また、第3次食育推進基本計画は、その推進のために食育に関するエビデンス『食育ってどんないいことがあるの?～エビデンス(根拠)に基づいて分かったこと～(統合版)』⁷⁾をパンフレットとしてまとめているが、内容は、共食、朝食摂取、栄養バランス、農林漁業体験に絞られており、子どもの居場所に関する食教育の効果については、エビデンスは示されておらず今後の研究の必要性が示唆される。

筆者らは、2020年度9月に「子ども」「食」を

キーワードにCiNii及びJ-STAGEで検索できた5,613件の論文中、重複や学術誌・紀要以外の論文、子ども以外を対象とした実践を除外した605件の中から、更に「子どもの居場所」についての論文84件について、詳細な検討⁸⁾を試みたが、先行研究は主に子ども食堂を対象にしたものが多く、特に2018年以降の子ども食堂の増加にともない、研究数も増加していた。しかし、詳細な調査や研究検証は十分とは言えず、施設の運営実態⁹⁾、現状と課題¹⁰⁾、子ども食堂の分類¹¹⁾、スタッフの活動満足感・活動負担感¹²⁾などの調査研究や食活動などの実践報告に留まっていた。また、運営施設の食育意識や食育内容等については必ずしも明らかになっておらず、農林水産省「子供食堂と地域が連携して進める食育活動事例集」¹³⁾による事例報告などに留まっており、学術的な検討の必要性が示唆された。

更に沖縄県内の週に5日以上の開設を行っている子どもの居場所26施設に対して食に関するアンケート調査⁸⁾(回答施設25)によると、ほぼすべての施設が何らかの形で食事を提供しており、8割以上の施設で子どもも参加していた。しかし、その多くは配膳や片付け、食器洗いに留まっているが、簡単な調理や材料を切る等の調理に加わる活動を自らやりたがる子どもは多いとの回答を得た。また、施設職員は生活力や自立力の向上、自主性を尊重して調理に子どもを参加させたいが、人手不足で手が回らない、時間がない、台所が狭い等、時間的な制約や物理的な条件によって現状として実施できないとの回答もあった。アンケートに答えて頂いた方々からの自由記述等からも、日常の食に関する活動は、毎日繰り返され、食べる喜びや必然性を伴う行為であり、更にやり直しや修正が容易であり、正答を必ずしも求めないという意味で懐深く子どもたちの自尊感情や自己肯定感、意欲にも貢献できると改めて感じる事ができた。坂本ら¹⁴⁾は子どもの居場所での調理において、「食事支援を受ける子どもたちが、自ら調理できるようになることは、子どもたち自身の健康増進に寄与する可能性がある」と述べ、また村山ら¹⁵⁾の研究では、子ども食堂でのお菓子作り等を通して、児童の自己肯定感の向上が認められている。これらをふまえ、子どもの居場所における食や調理を

通した教育活動は重要な役割を果たすと考えられる。

本稿のフィールドとする「子どもの家Z」は、子どもの貧困率が全国一高い沖縄の中でも、特に親の経済的な理由などを起因とする生活課題を有する生活困窮世帯の子どもたちを対象としており、沖縄の子どもと貧困の縮図ともいえる場所であり、子どもたちは様々な背景を抱えて来所している。うるま市福祉課や小学校との連携のもと、放課後から最大21時まで子どもを預かり、温かい食事や入浴などまでを担う場である。日本財団の「全国で約100か所の子どもの居場所を作る プロジェクト」の拠点の1つとして2019年に開所し、現在は県内のNPO法人が運営している。2022年以降は、うるま市教育委員会が運営母体となる予定である。現在の施設運営責任者である、X氏は、自らの職業経験や子どもの居場所運営経験等から食に関する教育が子どもに与える影響を非常に高く評価してきた。我々は、献立作成等のボランティアの期間を含めて、子どもたちとのレポート形成を行い、他の指導員の方々と一緒になって子どもたちの課題を把握し、望ましい姿を描き、その課題解決のために食を中心とした企画を立て、実践し、記録、検証する事を試みた。

食に対する取り組みは、多くの場所で実践されているにもかかわらず、実践者が記録や検証ができるゆとりある環境にある事は少なく、効果については個別な事案として、口頭で仲間内だけで共有されることが多い。更には子どもの発達に影響を及ぼす要因は多様であるため、因果関係の証明には限界がある。それでもなお、子どもの貧困対策としての食教育は重要で必要である事には変わりはない。そこで、様々な実践と検証が積み重なっていくことが必要であると思い本稿にまとめた。

2. 対象と方法

本研究は、「子どもの家Z」に来所する児童10名（児童A～児童J）、幼稚園児から4年生を対象としている。開所当初はQ小学校校区の1～3年生を対象としていたが、きょうだいで通所やうるま市福祉課との調整などもあり、学年に関わらず、可能な範囲で受け入れるという体制である。

家庭的な影響を含む不登校の児童3名と休みがちな児童、虫歯の多さ等多様な課題も多く、学校

との連携も取りながら活動は進められている。

課題把握のために、スタッフに対し、それぞれの子どもの現状と課題の聞き取り調査を行った。また子どもたちに対しては、別室でスタッフ同席のもと、食事や生活面での聞き取り等を行った。それを元に、目指す姿、実践計画と観点別の観察シート作成を行った。それらの課題、物理的な条件、地域や家庭の状況を踏まえ、13回の企画を検討し、「子どもの家Z」の常勤スタッフ3名と筆者の4名で観察記入した。観察シートの記入実施は2019年4月～2020年1月（4月※、7月、10月、1月の計4回※4月は常勤スタッフ3名のみに依頼）である。

尚、実践中は、ICレコーダーを用いた音声記録とフィールドノートを用いて丁寧な記録を取り、子どもの変化について読み取る事とした。

3. 結果と考察

(1) 課題把握のための聞き取りとスタッフとのディスカッション

子どもたちに対しては、別室でスタッフ同席のもと、本人へ食事や生活面での聞き取り等を行った。更に、スタッフと共に課題のまとめ、ディスカッションを経て、課題を整理し、図1に示した。

聞き取りの際、一部の子どもたちには好きな食べ物や「子どもの家Z」で食べてみたい料理を書いてもらった（写真1～3）。子どもたちの表現する「好きなもの」は、果物等食品単体が多く、食や料理に対する知識も必ずしも高くはなかった。

(2) 目指す姿の作成と実践計画

課題を元に現行での目指す姿を7つに整理し、更に、その実現のための取り組みを検討し、具体的な実践に繋げた。実践と内容と手立ては必ずしもストレートに結びつくものではないが、何よりも子どもたちのリクエストを尊重し、物理的環境と地域性を考慮しながら実践内容を検討した。

子どもの家Zの子どもたちの現状と課題（2019年4月時点）

〈生活面〉

【生活習慣】

- ・排便の処理ができない子がいる。
- ・歯磨きの習慣が身についていない。
- ・お風呂に入る習慣が身についていない。
- ・就寝時間が遅く、起床時間も遅い。
- ・身の回りの整理整頓ができない。

【体験】

- ・家族以外との交流が少ない。
- ・五感を使った活動や感じたことを他者と共有する機会が少ない。

【自分自身に対して】

- ・周りの目を気にしてチャレンジすることに抵抗がある。
- ・自己主張が少ない。
- ・自己肯定感が低い。
- ・自分自身に興味関心が低い。

〈食事面〉

- ・学校給食以外の食事の欠食がある。
- ・少食または過食。
- ・好き嫌が多い。
- ・食に関する興味・関心が低い。
- ・固いものを食べるのが苦手。
- ・食べ物・料理名をあまり知らない。
- ・食事時の落ち着きがない。
- ・共食への関心が低い。

〈学力面〉

- ・ひらがな・カタカナ・かけ算に課題がある。
- ・感じたことや思いを適切な言葉で表現できない。
- ・黒板の文字を正確に写すことができない。
- ・宿題を終わらせることが重要になっており、問題を正しく解けていない。

図1 子どもの家Zの子どもたちの現状と課題

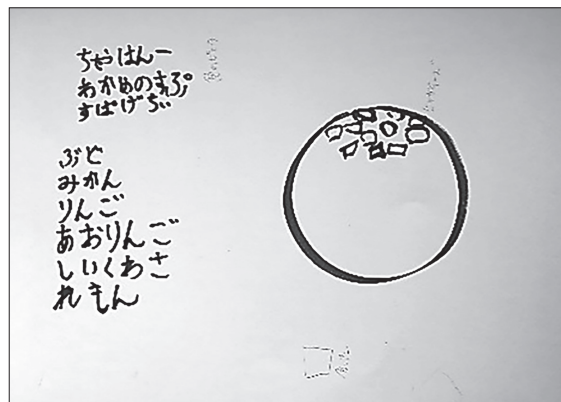


写真1 児童F（小3）が書いた聞き取り時の絵

バナタン (とろとろ)

OK

・チーズ(はかり)
・えび
・マカロニ

シチュー

オムライス

トマト

ピーマン

じゃがいも

たまご

ケー

```
graph TD; A[食べ物と身体に関連する話題を食事中に積極的に取り入れる] --> E; B[チャレンジしたことを皆で認める<br/>(成功・失敗にとらわれない雰囲気づくり)] --> E; C[嗜み嗜みメニューを取り入れる] --> E; D[献立を書く<br/>献立を紹介する] --> E; E[思いきり遊ぶ・楽しむ<br/>7つの目指す姿<br/>・自分自身を大切にする<br/>・基本的生活習慣の確立<br/>・命に感謝して頂くことができる・自分の意見を正しく伝えることができる<br/>・みんなと食事を楽しむことができる]; F[苦手食材を食べやすくしたメニューを取り入れる] --> E; G[料理カードを活用し、料理名に興味を持たせる] --> E; H[調理や片づけの体験を増やす] --> E; I[お箸を使った豆運びゲームや食事のマナークイズを取り入れる] --> E; J[畑やプランターで野菜を育てる<br/>その野菜を食べる・調理する] --> E;
```

食べ物と身体に関連する話題を食事中に積極的に取り入れる

チャレンジしたことを皆で認める
(成功・失敗にとらわれない雰囲気づくり)

嗜み嗜みメニューを取り入れる

献立を書く
献立を紹介する

思いきり遊ぶ・楽しむ
7つの目指す姿

- ・自分自身を大切にする
- ・基本的生活習慣の確立
- ・命に感謝して頂くことができる・自分の意見を正しく伝えることができる
- ・みんなと食事を楽しむことができる

苦手食材を食べやすくしたメニューを取り入れる

料理カードを活用し、料理名に興味を持たせる

調理や片づけの体験を増やす

お箸を使った豆運びゲームや食事のマナークイズを取り入れる

畑やプランターで野菜を育てる
その野菜を食べる・調理する

– 19 –

表1 子どもの変化を把握するための観察シート

質問に対して、記名をした子どもの状況に近い数字に○を付けてください。

実施日： 年 月 日 (回目)

「あてはまる」場合は6, 「ほぼあてはまる」場合は5, 「どちらかというとあてはまる」場合は4, 「どちらかというとあてはまらない」場合は3, 「ほぼあてはまらない」場合は2, 「あてはまらない」場合は1を○でかこんでください。

子どもの名前：

記入者：

No	観 点	具体的な育てたい姿	あてはまる	ほぼ あてはまる	どちらかと いうと あてはまる	どちらかと いうと あてはま らない	ほぼあては まらない	あてはまら ない	備考
		各項目は、現在の状況について回答してください。							
1	① 自分自身を大切に する	自分に対して肯定的である	6	5	4	3	2	1	
2		自分自身の好きなもの・好きなことがある	6	5	4	3	2	1	
3		自分の行動を自分で決めている	6	5	4	3	2	1	
4		自分自身の体に興味・関心を持っている	6	5	4	3	2	1	
5		命に対して大切(誠実)に向き合っている	6	5	4	3	2	1	
6		成長を意識して食事をとっている	6	5	4	3	2	1	
7	② 色々なことに チャレンジする	人目を気にせず活動できる	6	5	4	3	2	1	
8		周りの人の活動を見て、自分でも挑戦する姿がみられる	6	5	4	3	2	1	
9		できなかったことに取り組む姿勢がみられる	6	5	4	3	2	1	
10		一つのことを最後まで取り組む姿勢がみられる	6	5	4	3	2	1	
11	③ 基本的な生活習慣を確立する	基本的な挨拶ができる	6	5	4	3	2	1	
12		素直に「ありがとう」・「ごめんなさい」が言える	6	5	4	3	2	1	
13		身体を清潔に保つことができる(手洗い・お風呂・歯磨きなど)	6	5	4	3	2	1	
14		身の回りの片付けや食事の片付けができる	6	5	4	3	2	1	
15		食事中は座って食べることができる	6	5	4	3	2	1	
16		正しい持ち方でお箸を使うことができる	6	5	4	3	2	1	
17		規則的な食生活習慣が確立されている	6	5	4	3	2	1	
18		五十音が読める・書ける(ひらがな・カタカナ)	6	5	4	3	2	1	
19		基本的生活に必要な計算ができる(買い物時に使う計算など)	6	5	4	3	2	1	
20	④ 食べ物の名前がわかる 苦手な食べ物や料理に挑戦する	食べ物や料理の名前がわかる	6	5	4	3	2	1	
21		栽培や生き物の飼育に参加している	6	5	4	3	2	1	
22		野菜などの育てたものに愛着を持つことができる(育てることに興味関心がある)	6	5	4	3	2	1	
23		食べ物を粗末に扱わない	6	5	4	3	2	1	
24		自分の好きな食べ物、苦手な食べ物がある	6	5	4	3	2	1	
25		食べたい料理や作ってみたい料理のリクエストができる	6	5	4	3	2	1	
26		食に関する活動などの意欲がみられる(調理への参加、掲示板への記入、食事中の環境など)	6	5	4	3	2	1	
27		みんなと協力して、楽しく食事の準備ができる	6	5	4	3	2	1	
28		みんなと食事を楽しんでいる	6	5	4	3	2	1	
29	⑤ 自分自身の食生活に 関心を持てること が出来ること	一緒に食事をする人に気遣いができる	6	5	4	3	2	1	
30		自分の楽しかった経験をみんなと共有できる	6	5	4	3	2	1	
31									

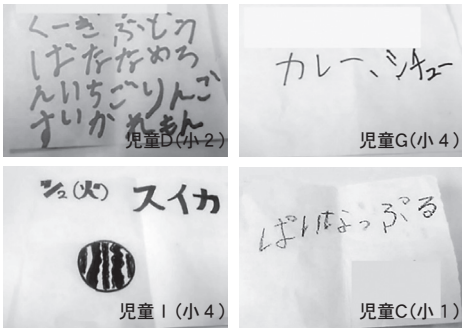



(4) 実践の記録と観察シートによる検証

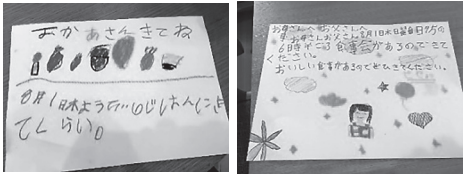




子どもの家は学校等とは異なるため、誰かが指導役になり、大きな声で指示して実践という事ではなく、メニューを企画し、材料を準備はするが、参加したい人が自発的に参加

する緩やかな介入である。特別に参加を促すこともしていない。実践テーマと育てたい観点と実践の様子、子どもたちの反応と評価の一部を表2にまとめた。

紙幅の都合上、すべてを詳しく報告はでき

表2 食を中心とした取り組み(全13回)

回数・日程	第1回 2019年7月2日～7月16日	第2回 2019年7月16日
テーマ	リクエストボックスに食べたいものをリクエストしよう	ネギを育てて、生き物を大切にすることを育てよう
参加児童	児童A、B、C、D、G、H、I	児童A、C、D、E、F、G、H、I、J
主となる観点	① ④ ⑤	② ④ ⑤
実践の様子	<p>児童の書いたリクエストカード</p>  <p>児童D(小2) 児童G(小4) 児童I(小4) 児童C(小1)</p>	<p>協力してネギをプランターに植える</p> 
子どもたちの反応・変化(一部)	<ul style="list-style-type: none"> ・児童Gを除くと、料理名ではなく果物などの食品の単体名を記述した。 ・「何これ?書きたい」と積極的に書き、対面での聞き取りよりもリクエスト用紙への記述が多かった。(児童D・G) ・「もずくは食べたことない」と発言するなど、学校給食や子どもの家Zで喫食しているものを認識していなかった。(児童A・C) 	<ul style="list-style-type: none"> ・「一緒に買い物に行きたい」、「ネギの頭切ったら可哀想だよ」、「大きくなるの楽しみだね」(児童C) ・「土の量はこのくらいだよ」と児童Aと児童Eに習ったことを教えていた。(児童G) ・「俺、最後の水かけやりたい」「片付けまでやらないと」片付け、水やり等最後まで責任を持って行動し、その後の水やり回数も最多であった。(児童E)
回数・日程	第3回 2019年7月23日	第4回 2019年7月30日
テーマ	七輪で色々焼いて、食体験を増やそう	リクエストのケーキを焼こう
参加児童	児童C、D、E、G、H、I、J	児童C、D、E、G、H、I、J
主となる観点	② ④ ⑤	① ② ④ ⑤ ⑥
実践の様子	<p>七輪でソーセージを焼く</p> 	<p>炊飯器でケーキを焼く</p> 
子どもたちの反応・変化(一部)	<ul style="list-style-type: none"> ・暑さのため、スタート時の参加はほとんどいなかったが、児童H、I、Jが参加し、楽しむ姿に誘われて参加児童が増えた。 ・「俺、やったことあるよ」(児童J) ・「やったことないからやってみたい。みんなにやろうって呼んでくるよ」(児童I) ・「これ焼きたい、次はチーズ焼いてみよう」(児童H) ・他の児童のソーセージを先に焼くなど、優しく面倒見の良い一面が見られた。(児童I・J) ・「次焼く係やりたいな」(児童D) ・「次はマッシュマロを焼きたい」(児童I) 	<ul style="list-style-type: none"> ・お互いに「手洗った?」と声をかけ合う。 ・普段の大人しい態度とは異なり、「自分もやりたい」と主張する。(児童E・G) ・自分たちで時間を分担して作業を交代するなど工夫している。(児童C・D・E) ・自信をもって卵を割る姿が見られる。(児童I) ・「見てー、できたよー」(児童C・D) ・「みんなで作ると楽しかったね。次はいつ作る?」(児童C) ・「楽しかった。またやりたい」(児童E) ・「次はデコレーションできるケーキも作りたい」(児童I)

回数・日程	第5回 2019年7月30日	第6～7回 2019年7月30日
テーマ	身長を測って、自分の成長を感じよう	招待夕食のメニューを決めよう、招待状を作ろう
参加児童	児童A、C、D、E、G、H、I、J	児童A、C、D、E、F、G、H、I、J
主となる観点	① ②	① ② ③ ⑤ ⑥
実践の様子	<p>身長を測っている児童G</p> 	<p>児童A（左）と児童F（右）が書いた招待状</p> 
子どもたちの反応・変化（一部）	<ul style="list-style-type: none"> ・「自分の身長わからないから測りたい」「大きくなりたいからいっぱいご飯食べる」（児童A） ・「俺もやりたい」（児童E） ・「誰が一番大きい？比べてみよう」（児童H） ・「身長を伸ばすのはカルシウムだった？」（児童J） ・学校で身体測定を受けているが、自分の身長を把握している児童は少なかった。 ・2か月後の身長計には、継続して児童たちが自発的に身長を測っている記録があった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「デザート班やりたい。」（児童H） ・「みんな食べたいのがあったら意見出してね」（児童I） ・「タコライスとチキンは？」（児童E） ・普段は人前に立つのは苦手であるが、積極的にリーダーシップ取る様子が見られた。（児童I） ・普段主張しない児童も意見を出し合い、お互い担当したい料理を確認しながら決めていた。（児童D・E・G） ・「これって字あってる？」（児童J） ・「次は、この色使うの。色たくさん使うの好き」（児童F）
回数・日程	第8回 2019年8月1日	第9回 2019年8月9日
テーマ	家族のために招待夕食を作ろう	イベントで販売するクッキーを作ろう
参加児童	児童A、B、C、D、E、F、G、H、I、J	児童C、D、E、F、G、H、I、J
主となる観点	① ② ③ ⑤ ⑥	① ② ③ ⑤ ⑥
実践の様子	<p>協力して調理をする</p>  <p>お母さんと一緒に配膳</p> 	<p>交代で材料を混ぜる</p>  <p>クッキーの型抜き・飾り付けを楽しんでいる</p> 
子どもたちの反応・変化（一部）	<ul style="list-style-type: none"> ・「手洗おう。みんなちゃんと手を洗わないと」（児童I） ・「切り方はどんな風にすればいい？みじん切り？それならやったことあるからできるよ。」（児童H） ・「俺もできるよ。ここでよく手伝っているからできる」（児童J） ・「〇〇も何かやりたい。大丈夫できるよ」（児童B） ・「大変だったけどみんなに喜んでもらえて良かった」（児童H） 	<ul style="list-style-type: none"> ・「俺もやってみたい。卵割るのやりたい」（児童E） ・「混ぜるのやらせて。次交代しよう」（児童C・E・J） ・「バニラエッセンスって甘い？舐めてみよう」（児童J） ・型抜きを使わず、オリジナルの形にするなど、楽しんで色々な形に挑戦していた。（児童F・H・I・J） ・クッキー生地やバニラエッセンスを少し舐めるなど、普段はやらないことも、他の児童の行動によってチャレンジする姿が見られた。（児童C・D・E・F・J）

回数・日程	第 10 回 2019 年 8 月 16 日	第 11 回 2019 年 11 月 8 日
テーマ	育てたネギを収穫して、ヒラヤーチーを作ろう	みんなで協力して餃子を作ろう
参加児童	児童 A、C、D、E、G、H、I、J	児童 A、C、D、E、F、G、H、I、J
主となる観点	① ② ③ ④ ⑤ ⑥	① ② ③ ④ ⑤ ⑥
実践の様子	<p>ネギの収穫・調理</p> 	<p>みんなで餃子を包もう</p> 
子どもたちの反応・変化 (一部)	<ul style="list-style-type: none"> ・「ネギ大きくなっているよ」(児童 F) ・「ネギ切るのはハサミじゃなくて包丁がいいな。包丁の方が使いやすい」(児童 D) ・「早く食べたいね」「包丁を使うときは猫の手でしょ？ちゃんとできるから大丈夫」(児童 C) ・「これなんて言う料理？食べたことない」(児童 A) ・「苦手でも自分たちが育てたものには愛着を感じ、チャレンジして食べる姿勢が見られた。」(児童 C・D) 	<ul style="list-style-type: none"> ・「ギョウザって作れるの？」(児童 A) ・「家で作ったことあるよ」(児童 I) ・「俺作り方わからないから教えてね」(児童 J) ・「いろんな形のギョウザ作ってみてもいい？みんなでいろんな形に挑戦してみよう」(児童 F・J) ・「お互いで声をかけ合い、色々な形の餃子作って楽しむ姿が見られた。」(児童 A・E・F・J) ・「みんなでギョウザ作れて楽しかった」(児童 E)
回数・日程	第 12 回 2020 年 1 月 20 日	第 13 回 2020 年 2 月 3 日
テーマ	健康を願って、みんなでムーチャーを作ろう	節分に好きな具材でオリジナルの恵方巻を作ろう
参加児童	児童 A、C、D、E、F、H、I、J	児童 A、B、C、D、E、F、G、H、I、J
主となる観点	① ② ③ ④ ⑤ ⑥	① ② ③ ④ ⑤ ⑥
実践の様子	<p>みんなでムーチャーづくり</p> 	<p>恵方巻の具材づくり・オリジナルの恵方巻</p> 
子どもたちの反応・変化 (一部)	<ul style="list-style-type: none"> ・「学校で作ったことあるよ」(児童 A) ・「何味作るの？黒糖が好きだな」(児童 I) ・「俺今日はやりたくないかも…。やっぱりやろうかな。葉っぱのたたみ方ってどうするの？」(児童 E) ・「俺は大きいのも作ってみてもいい？」(児童 J) ・「いい香りする。次はいろんな味作ろう」(児童 H) 	<ul style="list-style-type: none"> ・「卵割ののと焼くのやってもいい？ここで何回も作っているからできるよ」(児童 J) ・「恵方巻ってなに？」(児童 D) ・「何か作りたい。やらせて」(児童 B) ・「酢飯ってこんな風にするんだね」(児童 C) ・「恵方巻は好きなの入れて作っていいの？」(児童 A)

ないが、調理に慣れていない低学年の子には、安全な包丁の扱い方などを教えてあげるなどサポートする姿や「大変だったけどみんなに喜んでもらえてよかった」と、料理の大変さを感じつつも喜んでもらえる嬉しさを表現する場面など、我々にとってもやりがいの感じられる時間となった。

参加者は毎回7～10名の人数で、入れ替わりながら自ら進んで参加していた。家庭の事情より、来所日が定まらず、結果として参加が少なかった児童も1名いるが、参加した直後は観点の評価が大きくプラスに変化する事や、企画実践以外の場での夕食作りへの参加を希望する等、その影響が観察されたため、分析対象に含める事とした。

また、発達年齢による介入の効果も検討したが、家庭背景などが多様であり、生活年齢による差よりも個人差が大きいと判断し、児童一人ひとりの変化と、観点別に見た効果で検証する事とした。

1) 児童一人ひとりの変化

観察シートを用いた子どもたちの1年間の変化を観察シートとフィールドノートの記録を基にまとめる。観点ごとのレーダーチャートの数値は、4人の観察者の平均点を用いた。尚、チャート内の数字は、内側に開始時点の数値、外側が企画実践後の数値を示した。

①児童A(5歳 公立幼稚園通園)

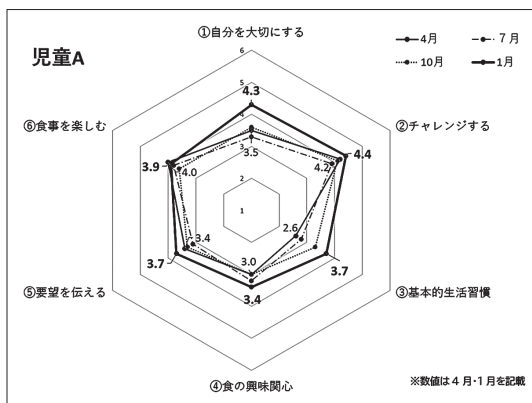


図3 観察シートを用いた児童Aの1年間の変化

4月の時点では、やせ形で食が細く、朝食、昼食ともに欠食の可能性があった。来所時に菓子を持参、食していることが多く、菓子で満腹感を得ていた。自分自身の体や食、調理に関する興味・関心は低かった。

第5回「身長を測って、自分の成長を感じよう」の取り組み後から、「大きくなりたいからたくさんごはん食べる」等の発言が見られ、夕食時に頻繁におかわりする等、徐々に自ら進んで食べようとする姿勢が出てきた。また共同調理も楽しむ様子が見られた。

1月には、観点「①自分を大切にする」「③基本的な生活習慣を確立する」に大きな変化が見られ、特に観点の下位項目である〔成長を意識して食事をとっている〕は2.3点から4.3点、〔身の回りの片付けや食事の後片付けができる〕が2.3点から3.3点、〔五十音が読める・書ける(ひらがな・カタカナ)〕が1.0点から4.3点となった。

②児童B(小学校1年生)

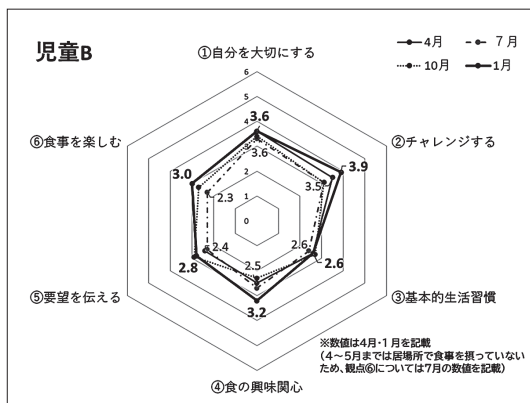


図4 観察シートを用いた児童Bの1年間の変化

4月の聞き取り時に好きな食べ物を聞くと、“人参と黄色いものが入ったやつ”、“ごはん”と答え、食材や調理に関する興味関心は低かった。また食わず嫌いや食体験の少なさが感じられた。

第8回の「家族のために招待夕食を作ろう」では“お母さんが来るから、自分もやりたい”等の発言が見られた。取り組み後から調理に参加する姿が増え、第13回の「節分に好きな具材でオリジナルの恵方巻を作ろう」では“何か作りたい、やらせて”と積極的に調理に参加する姿が見られた。

招待夕食づくりをきっかけとして、誰かのために作ることや共同調理の楽しさを感じ、調理に関する興味・関心が高まった。また食事中にはスタッフの声かけや他の児童の様子を見ることで、新しい食品にもチャレンジすることも増えていった。

1月には、観点「④食べ物や料理に興味関心を持ち、命に感謝していただくことができる」「⑤自分の食に関する嗜好や要望を伝えることができる」に変化が見られ、特に観点の下位項目の「苦手なものや食べたことがないものでもチャレンジする」は1.0点から2.3点、「自分の好きな食べ物、苦手な食べ物が言える」が2.0点から3.3点、「食に関する活動などの意欲がみられる」は1.5点から2.8点へ上昇した。

③児童C(小学校1年生)

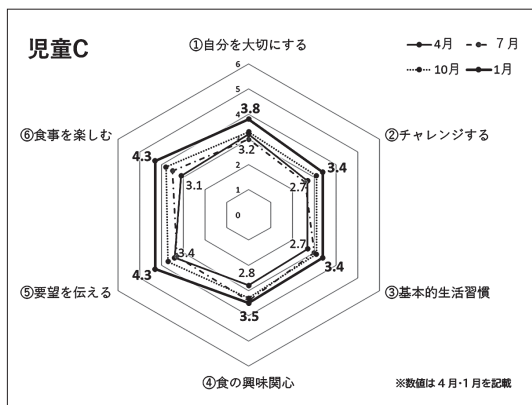


図5 観察シートを用いた児童Cの1年間の変化

7人きょうだいの末っ子で、4月は「子どもの家Z」に一緒に通う兄や姉に合わせて行動を決めることが多かった。苦みのある野菜など、苦手なものを頑張って食べる面もあるが、大人に褒めてもらいたいためか、野菜を口からティッシュに出し、食べたふりをすることもあった。

第4回の「リクエストのケーキを焼こう」では“みんなで作ると楽しかった。次はいつやるの？”等の発言が見られ、共同調理の楽しさを感じている様子であった。また、第10回の「育てたネギを収穫して、ヒラヤーチーを作ろう」のネギを切る際には、“包丁使うときの手は猫の手でしょ？ちゃんとできるから大丈夫。”とこれまでの調理経験で習ったことを覚えている発言や包丁を扱う際

は、自信を持って取り組む姿が見られた。調理活動においては1人でも積極的に“やりたい”と発言するなど、自分の行動を自分で決めることが多くなっていった。

1月には、観点「⑤自分の食に関する嗜好や要望を伝えることができる」「⑥みんなと食事を楽しむことができる」で大きな変化が見られ、特に観点の下位項目である「食に関する活動などの意欲がみられる」は3.3点から4.5点、「みんなと協力して、楽しく食事の準備ができる」は3.0点から4.5点、「みんなと食事を楽しんでいる」は3.0点から5.0点へ上昇した。

④児童D(小学校2年生)

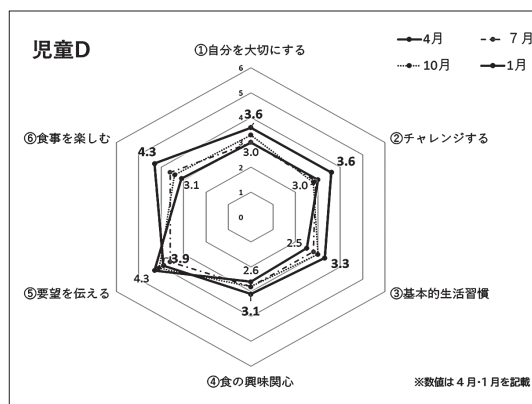


図6 観察シートを用いた児童Dの1年間の変化

やせ型で好き嫌が多く、少食であった。食事の際も野菜だけは省いてお皿に盛りつけることも多く、食事時の会話も少なかった。聞き取りで好きな食べものを尋ねても“オムライス”と答えるのみであった。

第1回の「リクエストボックスに食べたいものをリクエストしてみよう」では、“やりたい”と積極的にリクエスト用紙に書く姿がみられ、第4回の「リクエストのケーキを焼こう」では他の児童と時間を決めて作業を交代する様子等、意欲的な姿勢がみられた。またケーキが出来上がった際には、“見て、できたよ”と嬉しそうにスタッフへ見せに行く姿があった。

食事中においては、苦手なものは何も言わず残すことが多かったが、周りの大人からの声掛けや他の児童の食べる姿に影響され、“小さいのから

食べてみようかな”と発言するなど、徐々に苦手なものにもチャレンジすることが増えていった。

1月には、観点「③基本的な生活習慣を確立する」「④食べ物や料理に興味感心を持ち、命に感謝していただくことができる」「⑥みんなと食事を楽しむことができる」に大きな変化がみられ、特に観点の下位項目の「苦手な食べものや食べたことのないものでもチャレンジする」は2.3点から3.5点、「みんなと食事を楽しんでいる」は3.7点から4.8点、「自分の楽しかった経験をみんなと共有できる」は1.7点から4.3点に上昇した。

⑤児童E(小学校2年生)

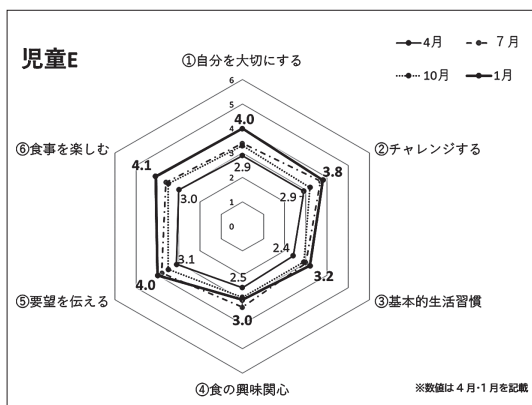


図7 観測シートを用いた児童Eの1年間の変化

4月の時点では、偏食が強く、ソーセージなどの加工品以外の肉類を食べなかった。また自身の体や食・調理に関する興味関心は低く、調理活動に参加することもなかった。

5月に行った夕食のオムライス作りをきっかけに、実践にも参加することが増え、第4回の「リクエストのケーキを焼こう」、第9回の「イベントで販売するクッキーを作ろう」では“混ぜるのやりたい。交代してやらせて”、“卵割る係やりたい”と自己主張し、積極的に参加する姿がみられた。「第5回 身長を測って、成長を感じよう」では“測るのやりたい”“ご飯食べたら大きくなる?”等を発言し、夕食では児童A、C、Dと声をかけ合い、おかわりする姿が見られるようになった。「子どもの家Z」での食事を通して、他の児童が食べる姿や「一口食べてみたら?」等の声掛けを行うことで、苦手な食べ物にチャレンジ

する姿も徐々に増加した。

観点「①自分自身を大切にする」「⑥みんなと食事を楽しむことができる」で大きな変化が見られ、特に観点の下位項目の「成長を意識して食事をとっている」は1.3点から3.3点、「自分の楽しかった経験をみんなと共有できる」は2.7点から4.3点に上昇した。

⑥児童F(小学校3年生)

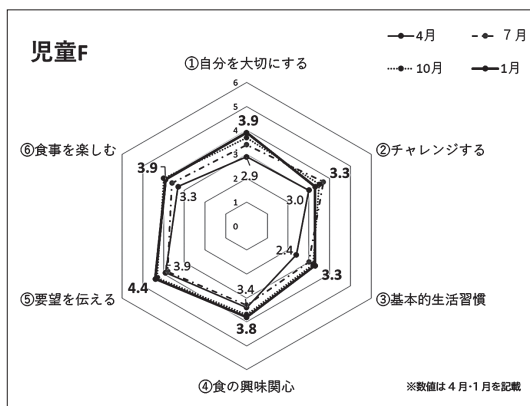


図8 観測シートを用いた児童Fの1年間の変化

大人数の前で強く自分の意見を主張することは少なく、食や調理に関する興味関心は高いが、活動は多くの児童と一緒に好まず、少人数での実践を好んだ。7人きょうだいの6番目で、家庭ではうまく甘えられず、「子どもの家Z」では大人と1対1で遊んでもらい、調理をして過ごすときに嬉しそうな表情がみられた。聞き取り時には、ひらがなやカタカナの筆記に課題が感じられた。

ぬりえや洋服選びなど色を使って楽しむ遊びが好きで、第7回の「招待夕食の招待状を作ろう」では絵を描いたり色を塗ったり、苦手な文字はスタッフに確認しながらもこだわりの招待状を作る姿が見られた。調理活動では、初めは共同調理自体を楽しんでいる様子であったが、回数を重ねていくうちに、盛り付け方などの色合いを意識したり、形に凝ったりするなど“こうしたい”、“この方が可愛いから”と自分の好きなことや、やりたいことを言える姿が多く見られるようになった。

1月には、観点「①自分自身を大切にする」と「③基本的な生活習慣を確立する」に大きな変化がみられ、特に項目の「自分自身の好きなもの・好き

なことがある〕は3.7点から4.8点、〔五十音が読める・書ける〕は2.3点から3.8点に上昇した。

⑦児童G(小学校4年生)

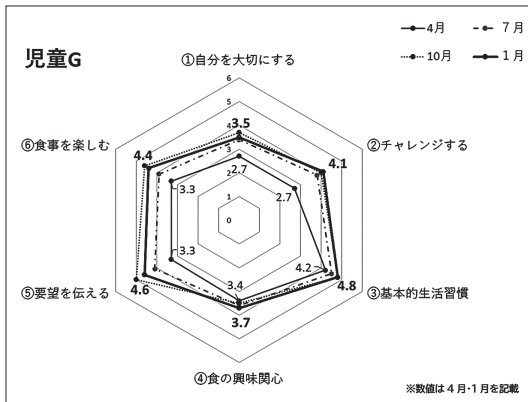


図9 観察シートを用いた児童Gの1年間の変化

食に対しては“なんでもいいよ”、“普通”等の発言が多く、食わず嫌いも多かった。食や調理に関する興味関心は低く、同学年の児童H、I、Jの参加に同調する形で参加していた。

第1回の「リクエストボックスに食べたいものをリクエストしよう」では、聞き取り時よりも多くの食べたいものをリクエストする姿が見られた。第4回の「リクエストのケーキを焼こう」では、“自分もやりたい”と発言し、また第6回の「招待夕食のメニューを決めよう」では児童たちと担当する料理を相談するなど意欲的に参加する姿が見られた。食事の際には周りの児童や大人が食べる姿を見ることで、“これ何?”、“どんな味?”などの発言が増え、初めての食べものにもチャレンジする姿や次の活動をリクエストする姿が見られるようになった。

1月には、観点「②色々なことにチャレンジする」、「⑤自分の食に関する嗜好や要望を伝えることができる」で大きな変化がみられ、特に観点の下位項目である「できなかったことに取り組む姿勢がみられる」は2.7点から4.5点、「食に関する活動などの意欲がみられる」は2.0点から3.8点へ上昇した。

⑧児童H(小学校4年生)

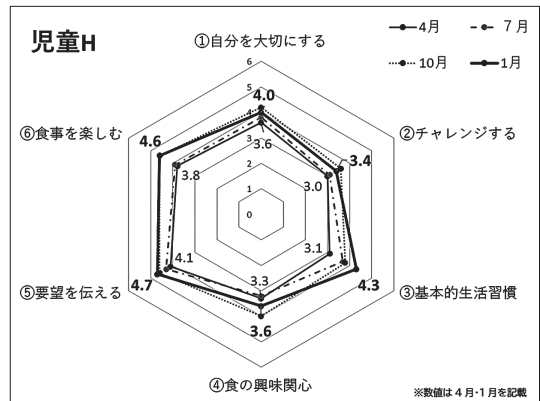


図10 観察シートを用いた児童Hの1年間の変化

4月の聞き取りには“お家でもっと料理とかやりたいけど、お母さんが忙しいからやらせてもらえない。本当はもっとやってみたい。”と発言し、調理に対する興味関心は高かった。「子どもの家Z」の通所児童の中では食体験や調理経験も多く、“それ作ったことあるよ。美味しいよね”と発言し、調理経験が無い児童にやり方を教えてあげる面倒見のいい姿が見られた。ただし、自分自身が初めての経験にチャレンジする場合は、周りの児童の様子を窺いながら参加することが多かった。片付けが苦手であり、身の回りの整理整頓はうまくできない様子が見られた。

第8回の招待夕食づくりでは“大丈夫。ここ(子どもの家Z)で何回もやっているからできるよ”と発言し、自信をもって取り組む姿が見られた。また招待夕食後には“大変だったけどみんなに喜んでもらえてよかった”と嬉しそうに話す姿があった。調理参加を重ねる中で“やってみたい”、“やらせて”などの積極的な発言も増え、新しいことにチャレンジする場合は、周りの様子だけではなく、少しずつ自分の意志でチャレンジする姿もみられるようになった。

観点「③基本的な生活習慣を確立する」「⑥みんなと食事を楽しむことができる」で変化がみられ、特に下位項目の「身体を清潔に保つことができる」は1.7点から3.8点、「身の回りの片付けや食事の片付けができる」は2.0点から3.3点、「一緒に食事をする人に気遣いができる」は2.7点から4.0点に上昇した。

⑨児童I(小学校4年生)

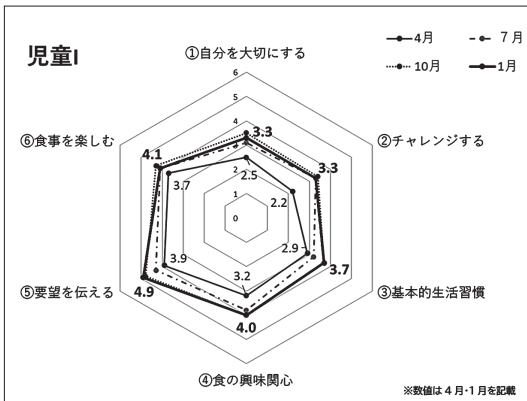


図11 観察シートを用いた児童Iの1年間の変化

⑩児童J(小学校4年生)

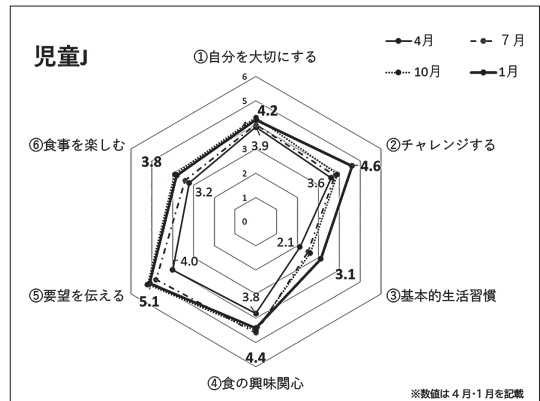


図12 観察シートを用いた児童Jの1年間の変化

7人きょうだいの5番目であり、「子どもの家Z」に通うきょうだいや他の児童の面倒をよくみており、自分の事よりも人のことを優先してしまうヤングケアラーの一面が見られた。調理や食の興味関心は高く、積極的に参加し、“ケーキ作りたい”、“今度グラタン作ろう”とリクエストする発言が多く見られ、調理に関しては自分の意見を主張することができたが、周りの目を気にして一歩踏み出す行動ができない面があり、率先して人前に出ることは少なかった。

第3回の「七輪で色々焼いて、食体験を増やそう」では“みんなにやろうって呼んでくるよ”と発言し、他の児童を誘いに行く姿が見られた。また“みんなどれ食べたい？”と他の児童を優先してソーセージを焼くなど、優しい姿が良い意味で発揮され、みんなの信頼を得ていた。第6回の「招待夕食のメニューを決めよう」では、率先してみんなの意見をまとめたり、“みんな手を洗おう”と声をかけるなどのリーダーシップを発揮する姿が見られ、リーダーとしての振る舞いが見られた。

観点「②色々なことにチャレンジする」「⑤自分の食に関する嗜好や要望を伝えることができる」に大きな変化がみられ、特に観点の下位項目である「人目を気にせず活動できる」は1.3点から2.5点、「食に関する活動などの意欲がみられる」は3.3点から5.0点に上昇した。

好奇心旺盛であり、新しいことや自分のやりたいことを積極的にチャレンジする姿勢がみられるが、自分自身の「やりたい」気持ちを他の児童に対して強く主張する場面が多かった。食や調理に対する興味関心は高く、積極的に調理に参加する姿があった。しかし字を書くことが苦手な面があり、メニューを書く等の文字を書く活動はあまり参加したがらず、自信の無い面がみられた。お風呂に入ることや手洗いを面倒くさがる面があり、身体を清潔に保つ生活習慣が身についていなかった。

第3回の「七輪で色々焼いて、食体験を増やそう」では積極的に食材を焼いていき、他の児童に“次焼いてほしいものある？”と要望を聞くなど優しく面倒見の良い場面が見られた。第9回の「イベントで販売するクッキーを作ろう」では、手洗いの声かけをはじめ、児童C、Eに対して“まだやってないよね？次交代しよう”と発言し、順番を決めて作業を行うなど調理中の言動に変化が見られた。第13回の「節分に好きな具材でオリジナルの恵方巻を作ろう」では、“卵割るのと焼くのをやってもいい？ここで何回も作っているからできるよ”と発言し、自信をもって取り組む姿がみられた。

観点「②色々なことにチャレンジする」「③基本的な生活習慣を確立する」「⑤自分の食に関する嗜好や要望を伝えることができる」において大きな変化がみられ、特に観点の下位項目である「できなかったことに取り組む姿勢がみられる」は3.3

点から4.8点、〔身体を清潔に保つことができる〕は1.3点から2.8点、〔食に関する活動などの意欲がみられる〕は3.7点から5.0点へ上昇した。

2) 観点別に見た児童の変化

各観点別の前後得点を比較したのが、表3である。実践前後で、①自分自身を大切に、②色々なことにチャレンジする、③基本的な生活習慣を確立する、④食べ物や料理に興味・関心を持ち、命に感謝して頂くことができる、⑤自分の食に関する嗜好や要望を伝えることができる、⑥みんなと食事を楽しむことができるのそれぞれの観点に有意な差が見られた。

また、すべての得点を合算し、項目数で除した平均点も、前3.16、後3.83であり $t(10)=10.42$ $p<.01$ で、有意差が見られた。

表3 観点別に見る児童の変化

$N=10$

		前	後	t 値
①自分自身を大切に する	平均 SD	3.18 .45	3.82 .32	6.06***
②色々なことにチャ レンジする	平均 SD	3.08 .56	3.78 .47	5.65***
③基本的な生活習慣の 確立	平均 SD	2.75 .58	3.54 .63	7.54***
④食べ物等に興味関 心を持つ	平均 SD	3.05 .44	3.57 .43	9.39***
⑤食に関する要望を 伝える	平均 SD	3.58 .57	4.24 .67	4.24**
⑥食事を楽しむこと ができる	平均 SD	3.34 .37	4.04 .44	4.77**

*** $p<.001$ ** $p<.01$

5. まとめと今後の課題

本研究では、子どもの居場所である「子どもの家Z」に通所する子どもの実態や課題に合わせて、食を中心とした取り組みを行い、その実践をふまえて効果を考察した。子どもの居場所における課題から望ましい姿に関わる大人が描き、計画的に実践介入する事は、効果がある事がわかった。また、保護者の多忙や不登校等で家庭や学校での体験が難しい場合でも、子どもの居場所における食に関する経験を通して、子どもたちの成長に寄与し、共食・共同調理の経験を通して、調理の楽し

さから食への興味関心を高め、自分自身を大切にしたり、チャレンジしたりする自尊感情や自己肯定感の芽生えも示唆された。ただし、介入実施前後において有意にポジティブな変化が見られたものの、決して高い得点とは言えず、新型コロナウイルス感染拡大防止のために継続を断念せざるを得ない状況もあった。今後も継続的な取り組みが必要であると考えている。

更に「子どもの家Z」に來所している子どもたちは多子世帯が多く、なかなか自身の主張ができずに、やりたいことを我慢しているケースも多かった。その子自身がどのようなものが好きなのか、本人も自覚していない場合も見られた。そのような実態も含め、一人ひとりに寄り添った取り組みの必要性を感じている。これは、現場のスタッフだけでは物理的に限界があり、我々のような第三者の介入が必要なのではないかと強く感じている。

また、人に対する実践研究の限界として、試みの成果のみを取り出して検証することは難しい。今回の実践検証についても、指導スタッフの日常的な関りも大きく寄与している事は言うまでもない。しかし、本実践の丁寧な観察記録や取り組み後の児童の表情等からも本実践の明らかな影響を読み取る事はできた。今後も長期的に第三者が加わり、実践介入や記録しながら、子どもの居場所における食に関する教育が、栄養や満腹感を与えるのみでなく、心身の発達や課題解決に寄与する事を検証し、積み重ねていく必要があると考える。

謝辞

本研究にご協力いただきました、「子どもの家Z」の子どもたち、保護者の皆様、スタッフの皆様は心より感謝申し上げます。

本研究は、琉球大学 人を対象とした研究倫理審査委員会「承認番号39. 子ども食堂・子どもの家を対象とした食教育の実態と可能性（研究責任者 浅井玲子）」の承認を得ている。

文献

- 1) 農林水産省「第4次食育推進基本計画」(2021年～2025年)、3頁

<https://www.maff.go.jp/j/press/syouan/>

- hyoji/attach/pdf/210331_35-6.pdf (2021年7月1日アクセス)
- 2) 農林水産省「第3次食育推進基本計画」(2016年～2020年)、23頁
<https://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9929094/www8.cao.go.jp/syokuiku/about/plan/pdf/3kihonkeikaku.pdf> (2020年6月10日アクセス)
 - 3) 内閣府「国及び地方公共団体による子供の居場所づくり」を支援する施策調べについて」(2019年7月3日)
<https://www8.cao.go.jp/kodomonohinkon/shien/index.html> (2020年4月23日アクセス)
 - 4) 沖縄県「沖縄県子どもの貧困対策計画【改定計画】」(2019年3月)
<https://www.pref.okinawa.jp/site/kodomo/kodomomirai/seishonen/kosodatec/documents/okinawakenkodomonohinkontaisakukeikaku3103.pdf> (2019年12月8日アクセス)
 - 5) 内閣府「令和元年度 子供の貧困実態調査に関する研究 報告書」(2019)
<https://www8.cao.go.jp/kodomonohinkon/chousa/r01/pdf-index.html> (2020年6月10日アクセス)
 - 6) 裕野佐也香・中西明美・野末みほ・石田裕美・山本妙子・阿部彩・村山伸子：世帯の経済状況と子どもの食生活との関連に関する研究、栄養学雑誌、75巻、1号、19-28頁 (2017)
 - 7) 「食育」ってどんないいことがあるの？ ～エビデンス(根拠)に基づいて分かったこと～統合版(令和元年10月)
<https://www.maff.go.jp/j/syokuiku/evidence/attach/pdf/index-30.pdf> (2019年12月1日アクセス)
 - 8) 大城まみ：「子どもの居場所」における食教育の実態と可能性、2020年度 琉球大学教育学部修士論文(未刊行)(2020)
 - 9) 町田大輔、長井祐子、吉田亨：全国の子どもの食堂の運営実態、日本食育学会誌、12巻、4号、335-341頁 (2018)
 - 10) 廣繁理美、高増雅子：こども食堂の継続的な運営に関する検討ー現状と課題を踏まえてー、日本食育学会誌、13巻、4号、297-310頁 (2019)
 - 11) 安福英希、森本富裕菜、前田博子：運営主体および空間からみた子ども食堂の分類に関する研究、豊田工業高等専門学校研究紀要、50号、31-37頁 (2017)
 - 12) 町田大輔、長井祐子、吉田亨：子ども食堂スタッフの活動主体性と関連する要因：活動満足感・負担感に着目した横断研究、栄養学雑誌、77巻、1号、13-18頁 (2019)
 - 13) 農林水産省「子供食堂と地域が連携して進める食育活動事例集～ 地域との連携で食育の環が広がっています～」
<https://www.maff.go.jp/j/syokuiku/attach/pdf/kodomosyokudo-33.pdf> (2020年12月5日アクセス)
 - 14) 坂本達昭、葛萌々美、中嶋名菜、近藤秋穂、湯池咲子、中村早百合、松田綾子：小学生の調理スキルと自尊感情を高める調理実習プログラムの評価、日健教誌、27巻、4号、348-359頁 (2019)
 - 15) 村山碧、菅原耕太、浅井玲子：子どもの自尊感情傾向に着目した調理介入の試み、琉球大学教育学部紀要、第99集、99-112頁